

シリーズ「21世紀に向けての広島大学のあり方—将来構想検討委員会答申」をめぐって

「シリーズ」を始めるにあたって

将来構想検討委員会は大変な努力を傾注され、今春、答申「21世紀に向けての広島大学のあり方」をまとめられた。この答申を前向きにとらえ、学内外の多くのご意見に耳を傾けるべく、この「シリーズ」を企画した。わが広島大学の21世紀像確立の一助となれば幸いである。

すでに『広大フォーラム』3号「編集後記」において、「将来構想検討委員会の答申『21世紀に向けての広島大学のあり方』をめぐって多角的な特集を組む予定で目下立案中である」と記した。5号、6号の特集内容がほぼ固まりかけた時期、7月25日の部局長連絡会議の席上（広報委員長はオブザーバーとして出席）、本年度の特集としての企画内容を紹介したところ、学長から特集の時期をずらしてほしい旨の発言がなされた。これを受けた後日、学長と協議した結果、特集形式を、「シリーズ」形式に変更して、企画を実現することとし、委員会の合意をみた。

学長の変更申し出の理由は、全学的コンセンサスが確立される以前に、学長、部局長等の見解を特集形式で「広報誌」に掲載し、学内外に公表することに対する懸念に要約される。

当委員会はこの申し出を了承し、形式を変更しても、特集の編集意図が大きくそこなわれることはないと判断した。

一方、形式変更以前すでに原稿依頼済みの先生があり、この変更のために多大のご迷惑をおかけすることとなった。

ここに経過を記し、原稿をお願いした諸先生方、関係諸方面に、深くお詫び申し上げる次第である。

最後に、このシリーズについてもご協力をお願いする次第である。

広報委員会

将来構想検討委員会答申を作成して



私は、昭和46年10月、新設もない理学部物性学科の教官として本学に着任した。当時、若気の至りで自分の好きなことをやろうと勝手な提案ばかりしたが、紛争直後ということもあって、飯島学長をはじめ執行部、事務局、理学部の諸先輩達が温かく私の提案をサポートして下さった。そして、私の望むような研究センター（核融合理論研究センター）を作り、育てて下さったことに心から感謝している。

あれから年月も経ち、諸先輩に受けた恩義に報いるべく、本学の将来への発展のために

理学部 西川 恭治

何かお役に立つことができないものかと考えていたところ、沖原学長より、将来構想検討委員会の話をうかがい、委員長を勤めるようすすめられた。本学には、大学教育研究センターがあり、またかつての改革委員会で活躍された立派な諸先輩がおられる中で、私のごとき大学問題の素人にこの仕事がつとまるとは全く自信がなかったが、幸い大学教育研究センターの関センター長と広島大学史の専門家である頼先生が副委員長として助けて下さることで、引き受けることにした。今一人の副委員長である安田先生には、霞

キャンパスの将来構想のとりまとめはもとより、昨年度広報委員長として、当委員会の活動を全学に周知させるべく御尽力いただいた。

こうして、自分としては、新キャンパスに何か特色ある大学作りを提案したいという程度の漠然とした考えのまま、3人の副委員長をはじめ委員の先生方に教えられ、助けられ、委員会の作業に取りかかったという次第である。その矢先、岡本前総合科学部長の刺殺事件が起きた。委員会の最初の会合は、岡本先生の葬儀の日とかち合ってしまった。喪服のまま出席した委員もいた。何か重苦しい空気の中でのスタートとなった。こんな大事件を起こして満足な手も打てずにいるような状況でとても21世紀のビジョンなど考える気にもなれないという委員も現れた。

最初に手がけたことは、沖原学長のすすめもあって、まず委員全員が現在本学の置かれている現状と将来について共通の認識に立つための勉強会を行うことであった。月1回、テーマごとに講師またはレポーターをきめて行った勉強会の記録は、委員会の経過報告として全学に配布した。この勉強会を通じて、新キャンパス移転に伴う本学の将来について、難題が山積しており、このままでは受験生にも見放され、本学の地盤沈下が進むのではないかという危機感に襲われた。しかし、逆にその危機感を全学につたえ、認識してもらうことによって、それをバネにして時代の変化に対応した新しい大学作りに活かすことができるのではないかという意欲もわいてきた。

年が変わって昭和63年度からは、四つの専門委員会を設けて専門分野別の検討にとりかかった。どの専門委員会も非常に熱心に作業を進めていただき、その報告を聞くたびに提

案事項を何とか実現可能な案にまとめなければならないという責任感に迫られた。専門委員会の報告は、まとめて12月に本委員会の中間答申として全学に提示し討議に付した。その反応は必ずしも活発ではなかった。理想と現実のギャップというか、「かくあるべし」がなかなか現場での論議に火をつけるには至らなかった。分量が多くて何から議論をしたらよいか分からないというご批判もいただいた。

少数ながら出された貴重な意見を取り入れて、いよいよ本答申の作成にかかったが、ここではできるだけコンパクトにかつ要点が正確に読み取れるように努力した。全学にわたる将来計画だから、どうしても総論的、抽象的になりがちで、具体性をもたせようすると総花的に羅列せざるを得なくなる。それは避けられないとしても、何とか力点が浮き彫りに出るようにまとめることに苦労した。文章作成に当たっては、分担執筆の委員の先生方に無理難題を出しつづ、関先生、頼先生に最後のつめをしていただいた。予定より約1か月遅れたが、何とか答申の形にまとめ上げたときの喜びは格別であった。

答申を発表して約半年経ち、学内でこれがどう受け止められているのか気がかりな毎日である。しかし、田中學長を中心に、答申の内容の具体化に向けてその方策が検討されはじめているということは、心強い限りである。改めて、答申作成に努力して下さった委員の先生方をはじめ、ご協力いただいた多くの方々に感謝の意を表するとともに、今後この答申に盛られた思想が、何らかの形で本学の発展に活かされていくことを期待してやまない。